

(研究ノート)

H. M. Chadwick と Anglo-Saxon Studies

大 森 裕 實

A Note on H. M. Chadwick and Anglo-Saxon Studies

Yujitsu OHMORI

一般に、英国に Oxford 大学：University College が誕生するのは 1249 年、Cambridge 大学：Peter House が誕生するのは 1284 年のことであるといわれる¹⁾。この Cambridge 大学において、英文学講座 (Old English, Middle English 研究) が開設されるのはそれほど古い話ではなく、1878 年に The Elrington and Bosworth Chair of Anglo-Saxon が創設されてからのことである (同趣の講座として、Oxford 大学には The Rawlinson and Bosworth Chair of Anglo-Saxon が先行する)。これらの講座主任教授の冠名となっている Bosworth とは *Anglo-Saxon Dictionary* (1882-98) を編んだ Joseph Bosworth (1789-1876) のことであり、Oxford 大学教授職にあった 1867 年に私財を Cambridge 大学に寄贈し、これを基金として上記の講座主任教授ポストが設けられたが、Cambridge 大学の講座名には辞書編纂のよき協力者であった妻の名前 Elrington も銘記されている。

その初代主任教授は Water W. Skeat (1835-1912) で、ME のテキスト校訂と語源辞典の編纂でつとに有名である。特に、*An Etymological Dictionary of the English Language* とその簡略版 *A Concise Etymological Dic.* (1882) は、日本においても『英語語源小辞典』(中島文雄・寺澤芳雄編) や『英語語源辞典』(寺澤芳雄編) と並んで、その恩恵に浴する研究者が少なくない。また、*The Works of Geoffrey Chaucer* (1895) は、後に Robinson 版 (> Benson 版) が上梓されるまでは、チャウサー研究テキストの定番であった。

ところで、この講座の第 2 代主任教授が本稿の中心にすえた Hector

Munro Chadwick (1870-1947) その人であり、何と 1912 年から 1941 年まで 30 年近くにわたって Cambridge 大学 (延いては英国) の Anglo-Saxon 研究の自律的基盤整備に尽力したことはあまり知られてはいない²⁾。事実、『英語学人名辞典』(佐々木達・木原研三 編)にもその名前を見出すことはできない。しかし、現在 Cambridge 大学に、The Department of English とは別組織で The Department of Anglo-Saxon, Norse, and Celtic (通称 ASN&C)が存在するが、これは他大学に類例を見ない Anglo-Saxon 研究の確立した姿を呈しており、その礎はまさに Chadwick の貢献によるものである。同大学同学科の人々はそれをよく認識しており、1990 年から毎年 Lent Term に特別講師を招いて Chadwick 記念講演会を開催している(このところは Trinity College が会場)。参考までに、第 1 回から第 13 回(2002 年)までの講師名と講演題目を記しておく。これを見ると、ゲルマン系にもケルト系にも配慮した、また、歴史的側面と言語文学的側面に配慮した、バランスのよい構成になっていることが分かる。

1. Donald A. Bulloch, "Friends, Neighbours and Fellow-drinkers: Aspects of Community and Conflict in the Early Medieval West."
2. Bruce Mitchell, "H. M. Chadwick, *The Study of Anglo-Saxon: Fifty Years On.*"
3. Pádraig ó Riain, "Anglo-Saxon Ireland: the evidence of the Martyrology of Tallaght."
4. Gad Rausing, "Emperors and popes, kings and bishops: Scandinavian history in the 'Dark Ages'."
5. Peter Sawyer, "Scandinavians and the English in the Viking Age."
6. Daniel Huws, "Five Ancient Books of Wales."
7. Isabel Henderson, "Pictish Monsters: Symbol, Text and Image."
8. Peter and Ursula Dronke, "Growth of Literature: the Sea and the God of the Sea."
9. Donald Scragg, "Dating and Style in Old English Composite Homilies."
10. Marged Haycock, "'Where cider ends, there ale begins to reign': drink in medieval Welsh poetry."
11. Andrew Wawn, "'Fast er drukkið og fátt lært': Eiríkur Magnússon, Old Northern Philology, and Victorian Cambridge."

12. Richard Gameson, “The scribe speaks? Colophons in early English manuscripts.”
13. James Graham-Campbell, “Pictish Silver: Status and Symbol.”

Chadwick の Anglo-Saxon 研究については後述するとして、ASN&C の歴代 Bosworth Chair をここで列記して参考に附す。

第3代は Bruce Dickins (1889-1978) で、ルーン文字の専門家にして、ME テキストとして *Early Middle English Texts* (R. M. Wilson と共編, 1951) という 12 世紀~13 世紀のものを編集した英文学読本で知られる。Viking Society の会長も務めた。

第4代は Dorothy Whitelock (1901-1982) で、Chadwick の直弟子にして、Anglo-Saxon 史と OE の専門家。日本の英語文献学研究者には *Sweet's Anglo-Saxon Reader in Prose and Verse* の改訂版 (1967) でよく知られている。大場啓蔵氏が英国留学した折に Whitelock 女史の薫陶を受けたことや当時の英文学科・ASN&C の様子は『ケンブリッジの英文学』(篠崎書林, 1981) から窺い知ることができる。

第5代は Peter Clemoes で、氏についても大場 (1981) が雄弁に語ってくれる。Anglo-Saxon 写本研究の第一人者で、Ælfric の写本研究で知られる。Ælfric's *First Series of Catholic Homilies* の校訂等の他、*Liturgical Influence on Punctuation in Late Old English and Early Middle English Manuscripts* (1952) の著作もある。

第6代は Raymond Page で、ルーン文字研究として *An Introduction to English Runes* (1973), *Runes* (1987) や *Runes and Runic Inscriptions* (1995) があり、Anglo-Saxon 史家でもあるが、久保内端郎氏や佐藤修二氏と親交の深い Parker Library (Corpus Christi College) の librarian を務めていた。筆者は在外研究で Cambridge 滞在中に、Trinity College の fellow garden で開かれた ASN&C 主催の garden party で偶然言葉を交わす機会を得た。

第7代は Michael Lapidge で、*The Cambridge Companion to Old English Literature* (M. R. Godden と共編, 1991) でも知られる中世英語英文学者である。第5代主任教授 Clemoes が創刊した年刊学術雑誌 *Anglo-Saxon England* の編集を引き継ぎ、精力的に Anglo-Saxon 研究を推し進めた。また、後述する Raymond Bruce Mitchell 博士 (Oxford 大

学 St Edmund Hall, 1987 年に退官；Tolkien の高弟にして Campbell の学統を継承) との学術的親交も深めた。

第 8 代は現在主任教授を務める Simon Keynes で、Anglo-Saxon 史家にして、OE 資料の校訂家でもある。その姓が示すように、経済学者の John Maynard Keynes が大叔父にあたる Cambridge の Don 家系の主要な一員で³⁾、Simon Keynes の *AS Chronicle* 校本が大学図書館や Wren Library (Trinity College) に所蔵されている。筆者は Trinity College 中庭に面した時計台下にある Keynes の大きな研究室を訪れた際、Bosworth が座ったという実物の椅子(緑の皮革製)を目にする機会に恵まれたが、文字通り Bosworth Chair というわけである。また、現在の ASN&C には、もう一人の教授 David Dumville があり、学科の二大支柱の一方である Celtic 系の教育・研究の中心的役割を果たしている。Dumville は古文書学者で、数多の著作・論文の中でも、*A Palaeographer's Review: the Insular System of Scripts in the Early Middle Ages* (Kansai U. P., 1999) などは最近の日本人研究者にも親しい。

ここで話を本題にもどして、ASN&C に多大の貢献をした Chadwick の志向した Anglo-Saxon Studies とは如何なるものであったかを考えてみたい。Chadwick の著述は、Isabel Henderson 編 *A List of the Published Writings of Hector Munro Chadwick and of his wife Nora Kershaw Chadwick presented to Nora Kershaw Chadwick on her Eightieth Birthday* (Cambridge, 1971) に詳しいようだが、Chadwick の主要著作の次のものは、すべて Cambridge U. P. から上梓されている——*Studies in Old English* (1899); *The Cult of Othin* (1899); *Studies on Anglo-Saxon Institutions* (1905), *The Heroic Age* (1912); *The Nationalities of Europe* (1945); *Early Scotland* (1949); *Studies in Early British History* (Chapter I-III) edited by Nora K. Chadwick (1954); *The Growth of Literature*, 3 vols. in collaboration with Nora K. Chadwick (1932-40)。これらに加えて *The Origin of the English Nation* (1907) という著作もあるが、これを含めて、氏の著作群からは、Anglo-Saxon の初期の歴史に注目した側面と、ギリシア語やゲルマン諸語の英雄詩との比較文学の研究方法を発達させた(後に、ケルト語、スラブ語、サンスクリット語、エスキモー語、ポリネシア語文学に拡張した)側面を特徴として指摘すること

ができる。

しかし、ChadwickのAnglo-Saxon研究にかける情熱と姿勢を直截に看取できるのは、これらの著述からというよりはむしろ、氏が30年近いBosworth教授職を勇退する直前に著わした*The Study of Anglo-Saxon* (1941, 1955²)において他にないと思われる。

*The Study of AS*の初版序文においてChadwickはせっきやくBosworthの基金で設立された講座だが、大学内外においてAnglo-Saxon研究に対する無理解と偏見とが行き渡り、当該講座の健全な発達を阻害する危険性を孕んでいることを懸念する。大学においては、まるでラテン語学習のように、歴史や文化から乖離した単なる屈折言語の学習に過ぎないかのような矮小化がなされ、また一般社会において、大学生でない者にとっては魅力がなく役に立たない研究（単なる稽古事）のような印象を与えている実態がある。しかし、それは大きな誤解であって、大学生であろうとなかろうと、そのいずれにもAnglo-Saxon研究の価値を示すことが十分できると同時に、それが教授職たる者の務めでもあるという強い信念を提示する——“Indeed I doubt whether there is any other subject which the home reader will find easier to take up in his spare time, and from which he is likely to obtain more interest and intellectual satisfaction”——。

さて、*The Study of AS*初版は全部で4つの章から構成されているが、各章の要点を簡潔に記述すると次のようになる。

①第1章「Anglo-Saxon時代の文学と遺産」は、博覧強記ぶりを発揮して、手際よくAnglo-Saxon文化の総括的記述を行なっている箇所、まさにOE期こそイングランド文明・文化の揺籃期であり、すでに7世紀頃から欧州大陸や地中海地方からそれを享受する準備が整っていたという。

②第2章「Anglo-Saxon研究の価値」では、当該研究がそれ自体に価値があるという側面と、それが後続時代に投げかける影響の側面から価値があるという「二重の価値」をもっていると指摘する。この文脈で、後続時代に投影する光とは何か——それは、言語、文学、社会政治史、教会制度、農業、尺度、貨幣の鑄造、芸術、意志伝達の方法と枚挙に暇がない。すなわち、本章最終箇所で繰り返し述べられるように、Anglo-Saxon時代から十二分に知的財産を得ようとするれば、当時のあらゆる営み（知的活動、社会的活動、政治的活動、芸術的活動）を考慮に入れておかねばならないが、もしこれに成功すれば、自国の中でだけで十分に過去を比較できることに

なり、このようなことはヨーロッパにおいて他にほとんど類例がないほど卓立したものとなる。

③第 3 章「同族性と有力要因の研究」では、比較研究の重要性が強調されている。特に英語史の研究にとって、Anglo-Saxon の知識が不可欠であり、それが英語史研究に寄与する処は多大であるが、その逆の方向性は期待できない。すなわち、後続する時代 (ME や EMod. E) の英語研究が Anglo-Saxon 研究に寄与する可能性は低いという⁴⁾。従って、初期ゲルマン諸語の研究、12 世紀のラテン語やフランス語の研究、OE と同期の諸外国語の資料研究、初期ラテン文献文学研究、欧州大陸における諸方言文献の研究、初期北欧語の研究、ローマ帝国文化の影響、イングランド人とブリトン人 (スコットランド人やウェールズ人) との関係、またアイルランドとの関係研究等々の重要性が指摘される。Anglo-Saxon 研究の価値と成果は、同時代の欧州大陸・ケルト・北欧の歴史や文学研究と重ね合わせることによって、また、英国内の先行する時代の歴史や遺物研究との関連づけや、Anglo-Saxon 文明と同じ発達段階にある諸民族の生活や資料を比較研究することによって得られるものと位置づけられる。

④第 4 章「Anglo-Saxon 研究の将来」は、当該研究の再燃が 16 世紀中頃に、Matthew Parker 等の神学論争によって触発されて活性化したことから現在までを回顧する。1750 年に R. Rawlinson の遺産により Oxford 大学に恒常的に設けられた講座においてさえ、Anglo-Saxon 研究が社会で専ら行なわれるべきものか、あるいは主に大学でのみ行なわれる趣のものなのかについて明確ではなかったと批判する。また、従来の枠組みにおける言語研究と歴史研究の分離についても問題があるとする。Chadwick の理想的 Anglo-Saxon 研究の在り方は、言語研究と歴史研究の融合にあり、あらゆる人文科学の知識を動員して、Anglo-Saxon の実態解明を図ることにあったことは明らかである。そして、その際に必要とされるのは従来のようなアマチュア研究者ではなく、研究手法と知識とを修得したプロフェッショナルである。

The Study of AS 第二版には、第 5 章として「Anglo-Saxon 研究の進展」が、第二次世界大戦を挟んで初版から 10 年余の時間を埋める効果を果たしているが、ここでは触れない。ただし、Chadwick が理想とし希求した Anglo-Saxon 研究の在り方は着実に歩みを進めているように思われる。Chadwick が提起した解決すべき課題にも、この 60 年で、かなりの程度ま

で解答を見出だしたり、予見性の誤謬を修正してきているとあってよい。例えば、1939年にロンドンから120キロ程度離れたSuffolk州のDeben河口附近のサトン・フー（Sutton Hoo）で発掘された船葬跡から出土した遺物は、どうやら7世紀に歿した東アングリア（East Anglia）の王を祀ったもので、624 A. D. 頃に歿したRaedwaldのものではないかと推定されている。そしてこの埋葬遺物が英語史・英文学の観点から意味をもつのは、OE英雄叙事詩*Beowulf*『ベーオウルフ』との関連においてに他ならない。

『ベーオウルフ』の現存する唯一の写本はBritish Libraryに所蔵されている、およそ10世紀末に書写したと推定される3,128行からなるものである。この物語の創作は古く、宮廷詩人により（おそらくは小型のハープを伴奏に）口承詩として伝承されていたものが、8世紀末までに今日の形にまとめられたものと考えられている。従って、作者は不詳ということになるが、修道院で教育を受けた学識のある人物であったと、作品に込められたキリスト教的要素から推定される。この物語は2部構成になっており、第1部において、ベーオウルフは沼地に棲む怪物グレンデルを倒し、またその復讐に現われたグレンデルの母なる魔女をも倒し、平和をもたらす。第2部では、50年が経過し、年老いたベーオウルフが再び、火炎を吐く竜と闘い、それを倒すものの、自らも致命傷を負って、称賛と愛惜のなかに荼毘に附され天へと召される。

この物語の冒頭部分に、サトン・フーの船葬を想像させるシュルド王（Scyld）の話（II. 1-52）が登場するが、この箇所には、シュルド王の遺骸を船に安置して、その船を数々の宝物・武器・甲冑・刀剣・胴甲で飾りたて、海へと流す有様が描写されている⁵⁾。これが極めて異教徒的儀式の様相で、果たしてこのような習俗が実在したのかどうかについては不確かであったのだが、1939年のサトン・フー遺跡から、『ベーオウルフ』で語られた内容と酷似する遺物が発見されたことにより、この英雄叙事詩の作者が、サトン・フーの船葬を見て知っていたか、あるいはキリスト教以前の英雄を弔う儀式に通暁していたということを証左するものとなった。これなどは文学、言語学、考古学、歴史学が融合してAnglo-Saxon文化の一端を明らかにした恰好の事例であろう。

ところで、Chadwickは一貫して、Henry Sweet（1845-1912）同様にAnglo-Saxonという術語を使用するが、後代の碩学Bruce MitchellはOld Englishを採用し、その名を冠した*Old English Syntax*（2 vols., 1985）

や *A Guide to Old English* (Fred Robinson と共著, 1992⁵) はその水準の高さで定評がある。もちろん、Anglo-Saxon であれ Old English であれ、厳密には、West Saxon 方言で書かれた *Anglo-Saxon Chronicle*, *West Saxon Gospels*, *Ælfric's Catholic Homilies* 等ばかりではなく、Norhumbria 方言で書かれた *Bede's Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* の英訳, *Cadmon's Hymn*, *Lindisfarne Gospels* も射程に含み、Mercia 方言で書かれた *Corpus Glossary*, *Vespasian Psalter*, *Life of St Chad* 等も、さらには Kent 方言で書かれた *Kentish Psalms*, *Kentish Hymn* も包含することになるが、何といても Wessex の王 Alfred the Great の貢献により West-Saxon 方言の文献資料が多いため、一般的には *Beowulf* や *Anglo-Saxon Chronicle*⁶) を中心とした当該地域方言を OE の標準語 (standard written form) とみなす傾向があるが、OE に標準語など存在しないことは銘記しておかねばならない。たとえ Bruce Mitchell が出版社の意向を汲んで Old English という名を自身の著書に冠し、氏の姿勢に言語研究の色彩が強調されているとしても、*A Guide to Old English* を少しでも覗いたことのある者なら、その第 6 章 (§§.215-251) として、35 頁にわたり *An Introduction to Anglo-Saxon Studies* が盛り込まれていることに気づくであろう。そこでは、Anglo-Saxon 期 (OE 期) を 449 A.D~1066 A.D. の 617 年間と仮定すると、Columbus がアメリカ大陸入植への先駆けをつくった 1492 年から現在までとを比較して、その期間の長さを想定させることに始まり、「歴史」「考古学」「言語」「文学」についての要領を得た説明が展開するが、この趣の入門書としては破格の扱いであろう。さらにこの観点は、後の *An Invitation to Old English & Anglo-Saxon England* となって結実する。本文 350 頁、Bibliography・Glossary・Index を含めると総 424 頁の大著である。第 1・2 章を費やして、Old English の言語的側面 (Spelling, Pronunciation, Punctuation, Other Differences between OE and Mod. E) の記述、第 3 章では Anglo-Saxon England の文化的側面 (Literature, History, Archaeology, Arts, Crafts, Place-Names, Life in the Heroic Society, Impact of Christianity) の解説、さらに第 4 章では OE 文学における「庭」の概念 (Plants from the Prose, Blooms from the Poetry) への詳細な言及が管見される。

ここに私達は、Chadwick が提唱し実践した Anglo-Saxon 研究の実際の学習方法が、Mitchell に確実に継承され提示されていることを再確認する

のである。およそ1世紀近くを経て、Chadwickの撒いた種子が着実に芽を出し、大地に根づいたことは間違いない。

また、Mitchellに至るまでの卓立した他の業績について、注意を惹いた主なものを列挙すると次のようになる(Mitchell, 1988参照)。さらに詳しくは、Mitchell (1990)を参照されたい。

Dorothy Whitelock (1955, 1979²) *English Historical Documents I : c. 500-1042.*

Neil Ripley Ker (1957, rept. 1976) *Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon.*

Alistair Campbell (1959) *Old English Grammar.*

J. R. Clark Hall (1960) *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*, 4th ed., with Supplement by H. D. Meritt.

J. D. A. Ogilvy (1967) *Books Known to the English, 597-1066.*

J. B. Bessinger, Jr. & Philip H. Smith Jr. (1969) *A Concordance to Beowulf.*

Alistair Campbell (1972) *An Anglo-Saxon Dictionary Based on the Manuscript Collections of Joseph Bosworth : Enlarged Addenda and Corrigenda to the Supplement by T. Northcote Toller.*

J. B. Bessinger, Jr. & Philip H. Smith Jr. (1969) *A Concordance to the Anglo-Saxon Poetic Records.*

Antonette di Paolo Healey & Richard L. Venezky (1980) *A Microfiche Concordance to Old English.*

Stanley B. Greenfield & Fred C. Robinson (1980) *A Bibliography of Publications on Old English Literature to the End of 1972.*

David Hill (1981) *An Atlas of Anglo-Saxon England 700-1066.*

Angus Cameron, Allison Kingsmill & Ashley Crandell Amos (1983) *Old English Word Studies : A Preliminary Author and Word Index.*

Richard L. Venezky & Sharon Butler (1985) *A Microfiche Concordance to Old English : The High-Frequency Words.*

これら単行本の他、1967年には *Old English Newsletter* (Old English Division: Modern Language Association of America) が刊行され、

Toronto 大学では Angus Cameron を中心に *Dictionary of Old English* の編纂が進められたが、編集主幹 Cameron の急逝(1983 年)と資金難により、完成が遅れている。また、1981 年に創設され、Lapidge が精力的に取り組んだ International Society of Anglo-Saxonists も隔年で開催され、その成果は *Anglo-Saxon England* に掲載される。

さらに、数多の秀でた学術論文や著作を別にして、最近の特筆すべきものはやはり *The Cambridge History of the English Language* 全 6 巻の完結であり、就中、Volume 1: *The Beginning to 1066* (ed. Richard Hogg, 1992) を看過するわけにはいかないであろう。

最後に、本稿を閉じるに際して、Chadwick が危惧した一般社会における Anglo-Saxon 研究の価値に対する認知度は、残念ながら、今なお低いということを附言しておきたい。例えば、大英博物館第 50 室中央に展示されたサトン・フー遺跡出土の 7 世紀の「兜」の復元物や「黄金バックル」他の黄金装飾品の数々を前にする時、その装飾文様がゲルマン人のそれとは異なり、細かな曲線が幾重にも絡みあったケルト人特有のものであることを看過する者がいないとしても、先に述べたような英雄叙事詩『ベーオウルフ』の船葬に関わる Anglo-Saxon 文化にまで関連づけ、その成果を評価する者は多くはないであろう。もちろん、日本において古典教育の必要性を訴える識者があるのと同様に、英国においても、定評のある一般紙において OE の知識の重要性を説くことはあるが⁷⁾、それは極めて保守的かつ常識的な考え方の一端を示しているに過ぎず、それにより一般的認知が進行しているとはいえない。

さらに悪いことには、Chadwick が同様に危惧した大学社会における Anglo-Saxon 研究に対する理解も、一時期ほどには安定したものではないようだ。英国においてすら、このところ毎年のように、大学の必修カリキュラムから古典語を排し、Chaucer 講座は廃止するのか、Shakespeare 講座はどうするのか、果たして Tripos (Oxford, Cambridge 大学の BA 学位取得試験科目)に残るのかといった悲観的な話題が新聞記事となる。いわんや、外国語研究に実利性のみを追求する昨今の日本の大学においておやである。余談になるが、日本中世英語英文学会は、この趣の危機感が拍車をかけたか(と推測されるが)、OE/ME に関する philological study を専攻する若手研究者の育成を目的として、2000 年以来「研究助成セミナー」を企画実施している。第 1 回は「Palaeography(古文書学)入門」(関西大学)；

第2回は「刊本研究」(鳴門教育大学)；第3回は「古典(OE/ME)の精読」(県立福岡女子大学)であった。筆者は毎回欠かさず出席するようにしているが、そこに参加する博士課程(含PD)の学生(東京大学大学院、慶應大学大学院、大阪大学大学院が多い——これは現在の日本の大学院の中で実質的にEnglish philologyの指導が重点的に行なえる研究機関である：例えば慶應大学はCambridgeから東20マイルのBury St Edmundsにマナーハウスを改築した研究所を設立し、写本・刊本研究教育体制を整えつつある)は優秀な才能をもち地道な研鑽を積んでいるが、近年の大学事情の厳しさから研究(生活)条件は悪くなるばかりで、Chadwickの希求したAnglo-Saxon研究が大きなネットワークを創造して、多角的側面からそれを行なう研究体制の整備は、道程が遠いといわざるを得ない。

先達の貢献により、せっかく大地に根づいたAnglo-Saxon研究が、一部の好事家(dilettante)の手に委ねられてはならないことは強調しておかねばならない。もっとも、このdilettanteという英単語も、18世紀前半にイタリア語のdilettante/dilettareから借入した際には、今日のような揶揄的ニュアンス——「何かに一生懸命励んではいるものの専門的スキルに欠ける人；道楽でやっている趣味人」すなわちamateurという含意——は含まず、ただ単に、「人間の可能性の豊かさ(例えば芸術)に喜びを見出だす人」を意味していたようだ。そのようなことは、philological studyの集大成のひとつである*Oxford English Dictionary*が教えてくれるところである。その本来の意味において、philologistとは智を愛するdilettanteであり、Chaucerの描いた次のような人物として体現される⁸⁾。そして稀代の碩学Chadwickもこうした居士のひとりであったとしても想像に難くない。

For when thy labour doon al ys,
 And hast mad alle thy rekenynges,
 In stede of reste and newe thynges,
 Thou goost hom to thy hous anoon ;
 And, also domb as any stoon,
 Thou sittest at another book
 Tyl fully daswed ys thy look,
 And lyvest thus as an heremyte,
 Although thyn abstynence ys lyte.

(*The House of Fame*, pp. 652-60)

註

1) 英国イングランドではその後、Durham 大学 (1832)、London 大学 (1836) まで大学は設立されず、この間スコットランドに相次いで大学が創設された：St. Andrews 大学 (1411)、Glasgow 大学 (1450)、Edinburgh 大学 (1583)。

〈中尾俊夫『英語の歴史』(講談社現代新書, 1990) 参照〉

2) 日本ではあまり知られていないし、*D. N. B.* にも記載は見出だせないが、例えば *The Encyclopaedia Britannica, 15th ed.* には記述のあることを指摘しておかねばならない。

Hector Munro Chadwick は 1870 年 10 月 22 日 Yorkshire 生まれで、Wakefield Grammar School を経て Cambridge の Clare College で学び、1893 年に同コレッジのフェローとなった。古典文献言語学から中世英語英文学と歴史学に目を向け、ゲルマンからケルトへと研究分野を広げた“English philologist and historian, professor of Anglo-Saxon at Cambridge University (1912-41), who made a notable contribution to the development of an integral approach to Old English studies”であると定義される。また、“Chadwick always insisted on treating a civilization as a whole. Britain in early Middle Ages meant to him not only history and institutions but also the literature, archaeology, art, languages, place names, etc. of all the peoples who lived there”という記述から氏の輪郭が浮かび上がる。

3) Noel Annan (1999), *The Dons : Mentors, Eccentrics and Geniuses* はケンブリッジに深く根をおろした家系を扱ったもので、the intellectual aristocracy の項では、p. 315 に Keynes family の系図が掲載されている。そこからは Charles Darwin と姻戚関係にあることが分かる。

4) 現在の私達から見ると、OE に後続する時代の英語研究が Anglo-Saxon の解明に寄与する可能性は、あながち否定できない。ME の話し言葉の研究が OE 期の記録されていない地域方言の形式と構造の手懸かりを与えてくれる場合もある。

5) 「家臣らは、慕わしき王、宝環を頒ち与え給う君、高名なる君主を、船の懐の、帆柱のかたえに安置し祀った。そこには、遠方より集めた数々の財宝が積みこまれた。武器・甲冑・刀剣・胴甲にて、船舶がかくも目もあやに飾られた有様を聞き及んだためしはない」(ll. 34-40)

〈忍足欣四郎(訳)『ベーオウルフ』(岩波文庫, 1999) 参照〉

6) OE 散文資料として価値の高い *The Anglo-Saxon Chronicle* は扱う記事の古い順に The Parker (Winchester) Chronicle; The Abingdon Chronicle; The Worcester Chronicle; The Peterborough Chronicle の構成となる。

7) 英国の一般紙 The Daily Telegraph の 1988 年 12 月 19 日号の Q&A において、Ye Schoolboyes Tale のタイトルの下、次のような質疑応答が掲載されている。

〈Mitchell (1992), p. 5 参照〉

SIR—Regarding the relative merits of teaching Latin and/or Greek in schools (letter, Dec. 12), might I suggest that a more suitable language for study would be Old English?

A Child equipped with a knowledge of Old English would better understand the idiosyncrasies of English grammar. Quite apart from access to masterpieces such as Beowulf and the Anglo-Saxon Chronicle, the mastering of later works by Chaucer, Langland and Shakespeare would be facilitated.

(下線は本稿筆者による)

8) このChaucerの自画像的イメージは、日本を代表するCeltic Philologistであった故・蛭沼寿雄教授の還暦記念の献辞として土居敏雄氏が贈ったことがあることを指摘しておく。

〈「蛭沼教授の人と学問」『蛭沼寿雄教授還暦記念論文集』(1976) 参照〉

参考文献

- Annan, N. (1999) *The Dons : Mentors, Eccentrics and Geniuses*. Harper Collins Publishers.
- Benson, L. (1987) *The Riverside Chaucer*, based on Robinson's *The Works of Geoffrey Chaucer*. Houghton Mifflin Company.
- Bryson, B. (1995) *Made in America*. Avon Books.
- Chadwick, H. M. (1955²) *The Study of Anglo-Saxon*, revised and enlarged by Nora K. Chadwick. W. Heffer & Sons Ltd.
- Cambers, R. M. (1932) *On the Continuity of English Prose from Alfred to More and his School*. Oxford U. P.
- Evans, A. C. (1986) *The Sutton Hoo Ship Burial*. British Museum Pub. Ltd.
- 神津東雄 (1962) 「英文学に対する古典の遺産」『英米文学史講座 1 : 中世』 研究社.
- 厨川文夫 (1962) 「ベーオウルフ」『英米文学史講座 1 : 中世』 研究社.
- Mitchell, B. (1988) *On Old English : Selected Papers*. Blackwell.
- Mitchell, B. (1990) *A Critical Bibliography of Old English Syntax to the End of 1984*. Blackwell.
- Mitchell, B. (1992) *H. M. Chadwick, The Study of Anglo-Saxon : Fifty Years On*. Department of ASN&C, University of Cambridge.
- Mitchell, B. (1995) *An Invitation to Old English and Anglo-Saxon England*. Blackwell.
- Mitchell, B. and Robinson, F. C. (1992⁵) *A Guide to Old English*. Blackwell.
- 中尾俊夫 (1989) 『英語の歴史』 講談社.

- 大場啓蔵 (1981) 『ケンブリッジの英文学』 篠崎書林.
大泉昭夫 (編) (1997) 『英語史・歴史英語学』 (英語学文献解題第 3 卷) 研究社.
忍足欣四郎 (訳) (1999) 『ベーオウルフ』 岩波書店.
佐々木達・木原研三 (編) (1995) 『英語学人名辞典』 研究社.
高宮利行 (1994) 『愛書家のケンブリッジ』 図書出版社.

(2003 年 10 月吉日 脱稿)